

京鹿子

令和四年六月一日発行
通巻一七四号(毎月一回一日発行)



6月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その八十一



嗟峨おぼる琴の遠音に迷ひ笛
淡海路のおぼるを抱く旅人かな
くちなはの神意のごとく杜走る
大願は瀬戸の小島へ花洛の忌
醍醐寺へ一對の影余花白し
夷国への親書携へ道をしへ

飼ひ犬と鎖の契り梅雨に入る
似て非なる令和の夫へ草矢射る

吟行・城南宮昇壇

戀塚の闇を解くも余花の雨
折り枝に寄せる名残りや花は葉に
閑雅なる緑の空や鳥羽離宮
曲水の宴を臉に朱のこころ
春水や柔き伏見の女酒

俳句四季六月号

鴛鴦の夏二つの水尾の憚らず

—
近詠

和田 照海



阿比漁

産土の蛸 蚪騒がせて近道す
紋白蝶 卑弥呼のくにへ紛れけり
阿比漁の一本釣や花みかん
傾いて岬もどりし鹿尾菜舟
岬端のいちばん舟や鹿尾菜採

—
近詠

松本 鷹根



万緑

花冷えの高さで街を見てをりぬ
風青く追ひて俳句の春の碑に
上流へ歩を促して鷺青し
毛虫垂れことの善悪風ゆだね
万緑に酔を溶かせて池の鯉

塩貝 朱千



退屈な鴉

媛神へまだ整はぬ初音して
二分咲きも画布に満開梅日和
古い猫の威風堂堂山笑ふ
薔薇の芽は未だ退屈な鴉の歩
幼ならの跳んで跳べない芹の水

英華採集

地球儀の日差しやはらか鳥帰る

福知山 吉岡知香

未だ収束の兆しが見えないロシアとウクライナの関係は、政治的な思惑の影に隠れて紛争地の人達に暗い闇を落としている。我々は、毎日の報道に言い難い怒りと遣る瀬無い思いを抱くも何も出来ない無力さを感じている。折しも日本に安住を求め越冬していた渡り鳥が帰る頃、机上の地球儀を春の日差しが優しく包んでいるのを見た作者の胸に去来したものは、本来の地球が太陽に包まれる日が来ることへの切実な願いに違いない。

老後てふ日差しの中の軒氷柱

寝屋川 蔵岡信彦

今や高齢化社会となり誰しもが心に過る「老後」という問題。人それぞれに考え方も違うであろうし取り組み方も千差万別であろう。掲句の作者も他人事ではない切実な事として捉えているのではないか。北国あるいは極寒の地方に見受けられる「軒氷柱」は、厳しい冬の象徴としてその姿を晒しているものやがて来る春にバトンを渡すかのように消えてゆく。我が身を「軒氷柱」と重ね合わせた掲句は同世代の者の心の叫びではないだろうか？

来る春に心のポケット表むけ

北桑田 磯部 恵美子

日本の四季には春夏秋冬があり各人各様に其々の季節を味わっている、と思われるが何故か冬だけは異様に長い気がするのは私だけであろうか？それは、多分に年を越していることも関係あるだろう。冬の長さがある故に次の春を待ち望む気持ちが膨らんでくる、とも言える。掲句の作者もその内の一人であり、長く仕舞い込んでいた「心のポケット」を開けようとしている。「心」を「うら」と読ませることによって下五への着地を完璧にした冴えが光る。

濃紫陽花 沼田巴字

雨の中もの言ひたげや濃紫陽花
鯉遠く撥ねてをりけり夏布団
若竹や空をくすぐる高さ持ち
落ちてくる光の渦や今年竹
ダムに沈みし村の名前や桐の花

雀色時 植村蘇星

微笑みの以心伝心木の芽風
追伸の三寒四温励まさる
季移りの句材百貨の春陽射し
省略に韻文きらり朧月
ほんのりと雀色時梅三分

昭和の日 北川孝子

昭和の日草ぬれている父情かな
手を合わし未来たのみて昭和の日
初燕あの世この世の落ち着かず
亡師恋ひ宇治のほとりで新茶買ふ
昭和の日想定外の今を生き

ぶらんこ 直江裕子

臘梅やなほも人品などいふか
不思議がることさへなくて椿死す
ぶらんこに揺れてゐるのは「これから」
落味噲を小瓶に詰めて恋終る
穴掘って埋めもどす春やはらかい

飛梅 高木晶子

雨水の日色を帯びくる美術館
法然の影絵雨水の空模様
校門を閉めて砂漠の春休み
広重の絵の中にゐる春嵐
飛梅の又も飛ばんとする開花

袋の鼠 奥田筆子

野は光の洪水たんぽぽ全開す
新入生どつとゴミ拾ひ部に入部
白苺袋の鼠いただけぬ
紫木蓮のスタンドグラス去りにけり
春月に叱られてゐる窓ガラス

白木蓮 伊藤希眸

白木蓮風ごとに散る家境に
金色の虚実編み込む春セーター
ロシヤ跋扈さくらさくらの並木道
五分咲きに桜とどめる雨一日
満開の花の下ゆく通所かな

梅雨の傘 井上菜摘子

六月の花嫁ふつとふりむきぬ
ふるさとに残してきたり梅雨の傘
泪ならじぶんで拭くわ梅雨の蝶
青葉木菟灯ひとつ消しておく
河骨によき雲流る一日かな

神麓集

更衣 村田あを衣

生き方の地図を塗り変へ更衣
梅雨の底吸取紙の尽きにけり
省略の出来ぬふる里麦の秋
時の日の吾が影いつも後れをり
時の日や生きる時間を画きなほす

春寒し 山中志津子

佗助のほつほつ昔語りかな
蠟梅の香を足し序章締め括る
久女読むそびら紅梅明りかな
人間の壁に春雷容赦なく
日々増ゆる戦火の犠牲春寒し

梅雨某日 井尻妙子

黙しゐることも主張や梅雨に入る
梅雨某日探すラップの切り口
梅雨長しフランスパンを抱く小脇
長梅雨の爆音で聴くビートルズ
園庭に転がるボール梅雨長し

風の伝言 鷺山珀媚

底辺の野を動線に初ひばり
羽伸ばす天使の遊びしやぼん玉
弦換へるギターの調べ木の芽吹く
はい、いいえ二択拒めず田螺鳴く
風紋は風の伝言鳥帰る

寒椿 亀井福恵

寒椿いまできること一つづつ
いのち一つ抱き夜寒の底にゐる
日脚伸ぶさきはひごとは風だより
先人の背中を追うて大試験
余寒なほ腰の恙に八つ当り

梅鉢紋 荊池和子

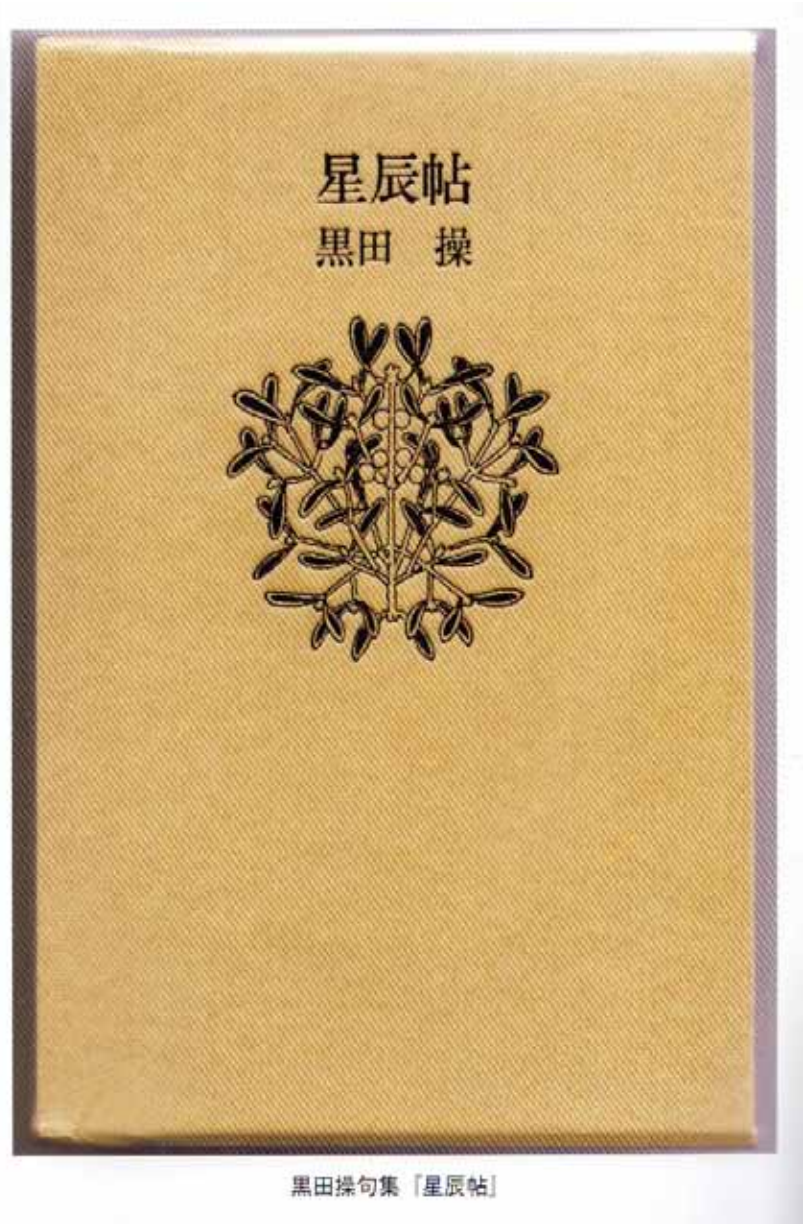
名残春梅鉢紋の風を着て
定めてふ鎧をまとひ地虫出づ
春の雪十七文字のひねり舞ひ
世の荒びいかにせむとや春炬燵
メルヘンの世界に遊ぶ露の臺

絆 西村白杼

水仙忌友の絆の直線に
発ちし子の部屋にハンガー春の雪
鳥帰る帰りし後の水さやか
今の夜を何度も浄化残る雪
忘るるの力ありけり木々芽吹く

光の束 安田優歌

花菜つぼみ光の束を湯に放つ
天心に平仮名で画く「春来る」
美少女のはにかむ笑みや花万朶
ふる里の原風景へ春を駈ける
紫雲英田に寝ころぶふたり空蒼し



桜の芽 本郷 公子

春光や深き眠りの宮址訪ふ
木簡の文字を繙く桜の芽
猫柳の水辺「ちひろ」の子らも来て
初音きく眠りの窓を開けたまふ
春の雪某氏に老後なかりけり

春の虹 石原 孝人

棟梁の削る檜の香や春の虹
花吹雪闇を乱して翻へり
短夜のまぶたを叩く雨の音
代掻の膝まで暮れて終りけり
草引くや蟠りの根の抜くるまで





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

せせらぎの音きよらかに芹の籠

岡山 佐藤 千恵

芹の水近くて遠き向う岸
船笛や島山笑ふ波わらふ

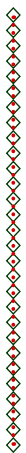
地球儀の日差しやはらか鳥帰る

福知山 吉岡 知香

ひと声の初音の余韻良き予感
シャンペンの空瓶潤む春灯

告白めく不思議な宴春の雪
選り好みの猫の餌皿余寒あり
春の雪樹々を華やげ木の香り
春の雪コーヒーカップの湯気弛ぶ

寝屋川 蔵岡 信彦



来る春に心のポケット表むけ

北桑田 磯部恵美子

曇天に二心を抱かず猫柳
余寒かな遅れぐせつく置時計
紅梅の空の結び目硬かりし
黒猫の四温待たれる一週間

梅原ひろし



影によりフォーム修正春マラソン
シルエットに語りかけたる花の宵
忘れられたコートの主に恋をする
レパートリー今日また増える春の卓
ふらこことや次会ふことを約したり

アツチ 伊吹 之博

侵攻の一面見出し冴返る

戸田 遠山 悟史

啓蟄やピエロ姿の大道芸

梅の香や風おだやかに汀子逝く
トンネルを出れば眩い春の海
春雷や侵略に耐へウクライナ

鳥雲に明日はあの山越えてゆく
春潮や望郷の眼の細くなる
春雪の降るふる見らは追ひかける
溪流の昂り鮎香手にうつし
亀鳴くや我が八十路余の応援歌
花の道一列となり小学生
海苔弁当ひらく囁りしきりなり
叱られて逃げ場所となる春炬燵
新しき靴音高く入学児
春ぎざす余白に蓄顔を出す
春の雨上総の国の肥沃かな
春の月北京五輪の聖火消ゆ
梅ふふむ今日より明日は純白に
駅中に天満宮や春うらら

市川 小島 正士

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

写メールの春の訪れ各地より
ゆつくりと生きむ臘梅深く吸ふ
冬眠の蝦蟇やスコップの石となる
泥葱をかかへ体臭変りけり
厨船盛り沢山の春野菜
玻璃扉河津桜の紅届く